

皆川淇園の言語研究—その言語観を中心に—¹

李 長波

一 はじめに

「開物学」を抜きにしては皆川淇園の学問体系を論じることが出来ない。その言語研究も「開物学」との関係抜きにしては語りえない。これまでの淇園に関する研究が「開物学」の謎解きを中心に展開されてきたのも当然である²。例えば、野口（1990）は「開物学」に自然哲学と言語哲学を見、浜田（1993a）はそこに「氣」の概念に基づく音義的な言語観を見だし、『実字解』『虚字解』『助字詳解』を「開物」の産物としているような場合である³。それはそれで淇園の学問体系や言語観についての一面の真実を語っているに違いない。少なくとも淇園に対する一つの見方を提供してくれるであろう。しかし、淇園の言語研究には「開物学」を抜きにしては語れない一面がある一方で、これまでに解明された限りの「開物学」には収まりきれない一面があることもまた事実である。そう言う筆者自身も勿論淇園の言語研究の全容を捉ええたとはいえない。本稿の試みはあくまで一つの解釈の可能性を示すに過ぎない。それが淇園の言語研究という多面体の一面の解明となれば十分である。

淇園の学問体系がそうであるように、その言語研究も演繹的で形而上的な側面と帰納的で実証的な側面を合わせ持っている。前者は「開物学」によって代表され、後者には『太史公助字法』（宝暦 10 年）『左伝助字法』（明和 6 年）『詩経助字法』（天明 3 年）『虚字解』（天明 3 年）『実字解』（寛政 3 年）『助字詳解』（文化 8 年）などの文典がある。そして『問学挙要』（安永 3 年）は淇園の初期の学問的態度と言語観を代表し、また文章作法を説く『淇園文訣』（天明 6 年から寛政 3 年までの間の成

¹本稿は東方学会主催の「第 41 回国際東方学会議」（1996.5.12. 東京）にて発表した内容をもとに全面的に書き直したものである。

²「開物学」の解明を試みる先行研究には野口（1990）、浜田（1993a）、浜田（1993b）、脇岡（1996）がある。

³淇園の言語観については、竹岡（1963）、戸川（1980）、浜田（1993a）などの先行研究があるが、何れも「氣」或いは「神氣」をキーワードとしている。そして、「神氣」をもつばら「氣」の意味に解している。しかし、後で触れるように、淇園の言語観を理解するためには、「氣」よりも「神」の概念が大事である。「神氣」は「氣」と同義ではなく、「神」と同義関係にあると、筆者は考える。

立と思われる)はその成立が『助字詳解』と重なるため、淇園の言語研究を見る上で重要な文献である。以下、主に淇園の言語研究の帰納的で実証的な側面に即して、その言語研究を可能ならしめた言語観の一端を整理したい。

二 言語とは何か

言語研究には、その人が意識するか否かに関わらず、言語の本質についての認識がなければならない。では、淇園は言語とは何かという言語の本質問題にどのように答えているのであろうか。それを解明する手がかりは「名・物・声・象」にある。まず「象」についての淇園の考えを見よう。

文章ニハ象ヲ立ツルト云コトヲ知ルベシ。易繫辭傳ニ、聖人立象以盡意トイヘリ。八卦ノ象ノコトナレドモ、畫ニアラハセバ、八卦ノ四象、心ニ持テバ、意象ニテ同ジコトナリ。イヅレニモ、象ヲ立ツルト云コトナケレハ、文意ハ盡シ難キモノナリ。象トハ山トイヘバ、其ヲ聞ク者、心ノ想ニ、山ノ象ヲ立テテ、聴キ、又讀ム書ノ中ニテ、山ト云フ字ヲ望ミテハ、山ノ象ヲ立テテ後ニ其文意ヲバ、其立テタル山ノ象ニ引合セテ、合點スベシ。川トイヘハ、心想ニ、川ノ象ヲ立ツベシ。百物百事、並ニ皆同ジコトナリ。『淇園文訣』(上/12)

ここでまず注目したいのは、淇園は「象」を外的な現象としての形ではなく、心的な「意象」として捉えていることである⁴。これは表現する側にとっては伝えようとする意味内容であり、理解する側にとっては言葉によって引き起こされる心的な「意象」即ち意味内容である。我々が文章を書いたり話したりするとき、単に筆が運び、口が動くのではなく、我々の内部よりして筆を運ばせ口を動かしめる「象」があり、それが我々の意識内言語として次々に言うべき事、書くべき事を命ずるのであ

⁴一般的な意味としての「象」と「形」については、錢鍾書氏は「『形』者、完成之定状；『象』者未定形前沿革之暫貌」(『管錐編』第二冊、611頁)と解しているが、「易」の「象」については、「故『易』之擬象不即、指示意義之符(sign)也」(『管錐編』第一冊、12頁)と解釈するように、「易」における「象」は一種の「形」である。淇園の言語観における「象」は心理的な意象即ち表象のことであり、その意味は自ずから異なる。それは例えば「象」を外的なものとする平田篤胤の考えと比較すれば一層はつきりする。

物あれば必ず象(すがた)あり。象あれば必ず目に映る。目に映れば必ず情(こころ)に思ふ。情に思へば必ず聲に出づ。其聲や、必ず其の見る物の形象(ありかた)に因りて、其の形象なる聲あり。此(こ)を音象(ねいろ)と謂(い)ふ。『古史本辭経卷之二』

る。我々の「象」として内部に展開する内的言語は、思想を言語の形に整理し、これを外部的表現に向かって定着させるものであり、言語活動における外的言語の誘導者であるということになる⁵。ここからは表現以前に属する意味の存在とその産出過程（coding）と、表現以後に属する意味の理解過程（decoding）に対する認識が読みとれる。そして、言語は話し手と聞き手との間において行われる意味の伝達行為であるという認識がはっきりと現われている。このように言葉の意味を人間の主観的な内的現象とすることによって、淇園は言語をその使用において観察し、話し手と聞き手双方の内面的な心的状態や過程に目を向けたのである。これは淇園の言語観の原点であり、最も注目すべき特徴であろう。そしてこうした認識が、ただ言語を意思伝達のための手段だとする考え方を越えて、言語を一つの記号系として考えるに至らしめたことは、次の文によって明かである。

心ノ文ノ起リハ、象ナリ。象ナルガ故ニ、文ハ言語ヲヨセ合セテ、其物象ノ條理ヲ明カシタルモノナリ、ヨセ合サルル言語ハ皆名ナリ、名トハ乃チ象ノ符牒付ナリ。符牒付ナル故ニ、國國ニテ、言語ト名トハ不同ナリ。符牒付トハ、本邦ニテハ、ソラト云、漢人ハ、天ト云フノ類ナリ。象ノ符牒付トハ、言語ノ上ニテハ、正當ニテハ、名ハ入ラザルモノニテ、名ノ入用ハ、不正當ノ處ノコトナリ。不正當ナルヲ、呼出スガ名ノ用ナリ。故ニ、名ハ人心ニ覺ヘテ居レル象ヲバ、呼出シテ想ワスル為ノ符牒付ナリ。言語文字ノ用ハ、究竟是ノ如キニ過ザルモノナル故ニ、言語ノツヅキタル所ハ、畢竟象ヲハヨセ合セタルモノナリ。象ヲバヨセ合セタルモノトハ、タトヘバ松ノ木ニ菊ノ如キ形ノ白キ花咲タリト言フニ、聞人心ニ松ノ木ノ象ヲ設ケ、ソレニ白菊ノ花ヲ、ヨセ合セテ想フコトナリ。タトヘバ又其僧還俗シタリト言フニ、聞人、心ニ其僧ノ面貌形容ノ象ヲ生ジ、ソレニ、外ノ俗體有髪ノ様子ヲ取り合セテ想フコトナリ。是ノ如ク、ヨセ合セテ出来タル言語ヲバ、文字ニウツセルモノナルガ故ニ、文章ノ起リハ、象ナリト言フナリ。『淇園文訣』（上/13-14）

ここにいう「名」とは「物若くは事」を表す実詞と解するよりは「言葉」の意に解すべきであろう。そして「符牒」とは「しるし」即ち記号のことであり、「符牒付」とは記号化する意味と共に、記号化された体系と解することが可能である。一方、

⁵ 泉井（1967）は二つの側面をそれぞれ「表現前塊」と「表現後塊」という言葉を用いて説明している。

「物」については『易学階梯』は次のように述べている。

物ト云フハ、何ニテモ其質ノ一成シタル所ガ他ト混ズルコトナク、別ニシテ挙ゲ指スベキニナリタルヲ物ト称スル故ニ、此物ト云フニハ数種ノ別アリ。有形ノ物ハ天地間ノ、人ノ目ニ見ル所ノ萬物ナリ。有象ノ物ハコレモ日月・星斗・風雲・雷霆、烟氣ノ属、人ノ目ニ見ルバカリデ手ニ捉ルコトヲ得ザル所ノ萬物ナリ。コレハ開クニ及バズシテ、常ニ人ノ眼前ニアルモノナリ。聖人ノ易ヲ以テ開クコトヲ求め給フハ別ニ又其ノ一種ノ、虚ニシテ目ニ遮ルコトナク、唯人心ニ其一成シタルトコロノ様子ノミアリテ、触レアタリテ覺ユル所ノ物アリ。是其開クコトヲ求め給フ所ノ者ナリ。此ハ文字ヲ其ノ宅トシ、名、声ヲ其ノ號トシテ、人ノ言語ニタヨリテ人ノ意識ノ間ニ往来出没スル者ナリ。此物ハ天下ノ神物ノ片ワレニテ、至極大切ナル者ナリ。『易学階梯ノ開物』

このように、洪園は「物」を「有形の物」、「有象の物」に加えて、「虚ニシテ目ニ遮ルコトナク、唯人心ニ其一成シタルトコロノ様子ノミアリテ、触レアタリテ覺ユル所ノ物」に分け、「開物学」はこのような即物的な「物」を究明するよりも、主にこの種の「物」（この種の「物」はもはや「物」ではなく「事」である）、つまり「声」に対する個別的な「象（言葉の意味）」と、それを司る根元的な意味の世界とを開示する学問の方法とされている。ここでは「開物学」は言語の個別的、そして一般的な意味を扱う学問として位置付けられていることに注目したい。しかし「象」と「物」の意味するところは洪園にとってはこれに止まるものではなかった。「物」には「名」が、そして「象」には「声」がそれぞれ対応する概念として考案されていたのである。

名は字なり。名物は字義なり。蓋し字は名より生じ、名は聲より出づ。是の故に字義の成る所は、其の実を是物と曰ふ。物は民心に在りては、其の象を成す。而して民の之を倣るに因るや、其の聲物の類を以てす。是の故に、名の聲は其れ物象の存する所の者なり。然るに民の之に倣るや、亦其の神の感じなす所を以てす。而して民自らは其の然る所以を知る能はざるなり。『易学開物ノ開物総論』

ここにいう「名」とは物事を命名して得た物事の名前であり、狭義的には「名詞」

の意味に用いられるが、広義的には「言葉」の意をも兼ねる。ここでもやはり後者の意に用いられていると考えられる。そして「名」の在り方は文字化される以前の音声言語の形で、「字」は音声の形で物や事に対応する「名」を書記言語に表したものの即ち書き言葉としての文字のことであると考えられる⁶。

そして、「名物は字義なり」の「名物」はその語構成からして一語とするか、二語とするかは判断の別れるところであるが、ここで、もし「名」を「物」と単なる並列関係にある語として解すれば、「名」と「物」とはそれぞれ字義であるという解釈になる。しかし、これでは「名は字なり」における「名（言葉）」の意味と矛盾することになる。何故なら、「字義」は「物」とは無関係ではないが、それ自体は「名（言葉）」の世界に属するものだからである。一方、古代中国においては、「名物之学」と称して、動植物や日用の物の名前を考証する学問的分野がある。ここでは「名物」は不可分な一語である。しかし、これでは「名物」の意味が極限され、言葉一般への射程を欠くことになってしまう。

以上の二つの解釈の外に、「名物」の「名」を動詞として解することも可能である。その場合、「名物」とは、物を命名すること、或いは物を命名する結果としての名と物との関係という意味になる。つまり、物を命名するという、命名行為の結果としてあるものは即ち「名物」であり、「名」と「物」との対応関係である。そして、「字義」とはまさにこの「名」と「物」との対応関係に他ならない。要は「名」を動詞とするか、名詞とするかではなく、「名」は動詞であると同時に、名詞であるという事実注目する必要がある。これは品詞的にのみならず、意味的にも「名」は命名するという意味と同時に、命名の結果でもあるのと表裏一体をなすものであることは言うまでもない。この解釈の長所はこの段の言説に一貫した論理的な解釈が与えられることにある。ここでは、このように「名物」を解釈したい。

以上の解釈をもとに、先に引用した箇所述べられたことを敷衍すると、次のようになる。

人々がある物や事を心の中でイメージしている時、そのイメージは即ち「象」で

⁶この書記言語と音声言語の関係については『名嚆』では次のように述べている。

蓋し萬物の名は皆上世に起これり。上世の民は其の淳粋の性、精明の智を以て、物の情を観、理を窮め、性を盡し、之を象るに聲氣を以てす。それ然して後に萬名出づ。名出でて後文字興る。文字なる者は遠きに其の名を以て通ずる所の具なるのみ。是の故に字畫は末なり。名物は本なり。『名嚆／序説』

ここでは、淇園は言語の音声の局面と意味の局面との間に「意味するもの」と「意味されるもの」との関係性を認めた上で、書記言語に対する音声言語の優位を主張していることが伺われる。

ある。人々は、その「象」を「声」で表現する。そうして表現された「声」には物や事の「象（物象）」、つまり意味が宿り、それが「名（言葉）」になる。「名（言葉）」によって指示されるものは「物」であり、「名（言葉）」を文字化したものが「字（文字）」である。とすると、「名・物」とは「名」、「物」のように別に存立するものでもなければ、単なる動植物や日用の物の名でもなく、「名（言葉）」と「物事」との関係を意味することになる。言い換えると、音声言語において、「声」は「名」の音声局面であり、「象」はその「声」によって指示される意味局面に当たる。それが書記言語においては「字（文字）」と「義（書記言語としての意味）」となる。「字」は文字記号であり、「義」はその文字記号の意味である。そして、「名」と「物」、「声」と「象」、「字」と「義」との関係を成り立たせるものは、つまり、「是の故に、名の聲は其れ物象の存する所の者なり。然るに民の之に倣るや、亦其の神の感じなす所を以てす」に言うところの「神」のことである。ここで淇園は「神」についてこれ以上多くは語らないが、この「神」と同じ意味の言葉に「神氣」がある。それはたとえば『助字詳解』の次の文脈に用いられている。

凡ソ人ノ心中ニ動ク神氣ハ、即チ天地間ノ神氣ノ通ヒテ、人ノ心主ノ觀感スルトコロノ、萬象ノ變動ノ運為ヲ現ジ、又因テ其心主ノ思擬ノ象ヲ、作スコトヲ為ル物ナル故ニ、其人々ノ心中ニ動クトコロノ、彼我屈伸出入往來千態萬狀舉數ベカラザルモノナリ。人ノ聲音ハ又其觀感スルトコロノ、物ノ情態ニ随ヒテ、ソレヲ形容シテ言フノ用ナル故ニ、此亦千萬聲ノ變化トナレリ。サレバ聲音ノ妙用ハ、其神氣ノスブルトコロニ屬セルモノニテ、其象自然ノ勢ニヨリテ、神氣ヨリソレニ應感シ、其分々ニ應ズルノ聲ヲ出セリ。是故ニ、心ハ神氣ニヨリテ、其動ヲ作スコトヲ得、神氣ハ聲音ノ萬別ニ乘リテ、其情ノ微至ヲ盡スコトヲ得ルコトナルニ、心ト聲音トノ相於ケルハ、其中間ニ神氣ヲ介ミテ、直通ヲ得ベカラザルモノナリ。『助字詳解／総論』

ここにいう「神氣」とは、まさに「人の聲音」と「物の情態」との間に介在し、それを統べる体のものであることは明らかである。この「神」は即ち人間の精神作用であり、人間の言語を産出する源であるということになる。

ここで「名・物」「声・象」「字・義」の関係についての淇園の考えをまとめてみよう。

淇園においては、「有形の物」と「有象の物」のような外在的な物質的な存在である「物」に対して、「象」はそうした外在的な事物ではなく意識せられた事物つまり心理的な実在である。そして事物は物象によってそれ自らを表出するが、それ自体はまだ言語の表現ではあり得ない。仮に「物」と「名」との間に言語の物に対する志向性、つまり言語の指示作用があるとすれば、この指示とか志向作用とかは必ずしも言語の意味作用と同一ではない。指示された概念は単なる命名にすぎず、表現行為を度外視しては言語の意味も成立しえないからである。従って「物」と「名」との二者関係だけではとうてい言語の意味を扱うことは出来ない。その為には淇園には新たな道具立てが必要であつたはずで、そしてそれを「声」と「象」に求めたのである。「象」は事物の似姿であるが、それは単に事物の模写ではなく、事物の表現である。それは単に内なる対象ではなく、表象であり、表現されることを前提とする、意味ある対象でなければならない。ここに「声」と「象」との間には指示作用とは違った、言語のよって立つところの意味作用がある。そして「神（神気）」は「名・物」、「声・象」、「字・義」との関係を成り立たせ、言語を産出する人間の精神作用であり、エネルギーにほかならない。とすれば、淇園にとっては、意味とはそれ自ら一つの物質的事物でもなく、単なる精神的現象でもなくして、精神と事物との関係であり、精神作用（「神（神気）」）と物的事象（「象・物象」）との間にある何かであるということになる。そして淇園にとっては、言語の本質はこの精神的なエネルギーの産出活動にほかならない。淇園においては、「名・物」、そして「声・象」「字・義」との関係はまさに指示作用と意味作用を区別するためのものであつたと考えられる。そして、指示作用と意味作用を区別させた最も大きな原動力は何と言っても言語外世界（「物」）と言語内世界（「名」）との区別であり、言語の意味の世界は事物とは別に存在し、意味された事物とは異つたものである。この意味の世界は必ずしも事物の存在とは同一ではない⁷。それはそれ自らとして一つの世界を構成しているということになる。そして、この言語内世界においては「物」に対する「名」は言語の命名行為に過ぎないが、そのような「名」が何ものかを表現し、意味を持つのは語としてではなく文としてであり、正しくいえば文における語（「声」と

⁷ 淇園の限界は「名・物」（指示作用）と「声・象」（意味作用）の双方に絶対的な有縁性を求めることにある。前者の恣意性はソシュールによって論定され、後者の恣意性については現在機能主義言語学や認知言語学の立場から様々な疑問が投げかけられている。

「字」)としてでなければならない。正確なる意味は文章の単位として用例の示されることによってのみ始めて定まるのである。事物の名と外界の事物(「名・物」)、そして音形式とその意味(「声・象」、「字・義」)を峻別しなければならなかった淇園にとっては、命名は物そのものを指示するが、必ずしもそれを表現してはいないはずで、事物の意味は単に命名せられるのみではなく、表現され、理解されるべきものでなければならなかった。

三 言語使用における言葉の意味

「名・物」「声・象」「字・義」によって言語外世界と言語内世界とを区別し、その言語内世界において、主観的な面を多分に含み、しかも言語機能の中軸的な存在として言語のすべてを存立させる「意味」を扱おうとした淇園は、語とその用いられる文を出発点として、更に文を含むコンテキストをも視野に入れることになる。

語勢ト云モノハ、文字ノツキ合セト、語意ノウツリ様ノ品ノ立チカタニヨリテ、其中ニ含メル意氣ノキオヒガ、即チ語勢ト云モノニナルコトナルガ故ニ、其要トスルトコロハ字義ナリ。然レドモ吾所謂字義ハ、世ニ稱スル所ノ字義ト異ナリ、世ニ稱スル所ノ字義ト云モノハ、字書ニ注セル所ヲ以テ字義トオモヘリ。(中略)字義ハ字書ノ注ニテ、其大略ハ知ルレドモ、其精義ニ至リテハ、其文字ノ聲ニヨリテ、易ノ開物ノ法ニヨリテ、コレヲ開カザレバ、トクトシタル処ハ知レザルコトナリ。『助字詳解／総論』

ここでは、淇園は「開物学」による字義解釈を強調するが、果たして「開物学」によって「字義」がすべて開示できるものであろうか。少なくとも現段階において解明されている限りの「開物学」の方法では、答えは消極的にならざるを得ない。では、淇園は字義を如何にして捉えていたのであろうか。この問題を解く鍵はやはり淇園の著作の中にある。まず淇園が扱う言語の単位を見てみよう。

篇ハ猶章ノ如ク、章ハ猶句ノ如シ。長短ノ相違マデナリ。サレバ一句一語トイヘドモ、皆句ト讀ト、二ツ折レガ打合ヒテ、一句一語トナリタルモノナリ『淇園文訣』(下/1)

古人ハ其文段ノ前後ノ引ハリニヨリテ、此文字ニ非ザレハ、其意味ヲ貫接シ難シトセル故ニ、此字ヲ用ヒタリ。句モ同シ意持ナリ。奇特ナル句ニ作り、奇特ナル字ヲ用ヒントテ作り置タルニ非ザルコトナリ。ソレヲモ辨ヘズ、前後ノ意味語勢ヲモ考ヘズシテ此字此句ノミヲ法トセントセバ、文ヲ書クニ、文理ノ不順不通ヲ成スベシ。『淇園文訣』(下/5)

ここでは表現に主眼を於きつつも、淇園は言語には「句」と「章・篇」という三つの単位を認め、「一句一語トイヘドモ、皆句ト讀ト、ニツ折レガ打合ヒテ、一句一語トナリタルモノナリ」のように、この三者に共通する構成原理を「句(文)」の二項性と二項間の相互関係に求めていることが看取される。つまり、「字(語)」は「句(文)」において、「句(文)」は「章(段落)」においてその使い方の正当性(真の意味)が決定される。これは即ち「句法」「章法」であり、これを含むものは「文理」という概念に他ならない。「字義」と「文理」との関係については次の引用を参照されたい。

サテ此文ノ神理ト云モノハ、原来字義ノ積ミテ、文理ヲ成シタルモノニテ、其文理ノ中ニ、其語意ノハヅミヲ寓ス。此ハヅミハ、即チ精神活用ノ機宜ニテ、機宜トハ、其上下先後及ヒ明晦等ガ、自然ト、天地上下四時晝夜ノ道ニ叶ヒ、天下ノ民ノ性情ニ合ヘルモノヲ云フナリ。『淇園文訣』(上/4)

ここでは、「其文理ノ中ニ、其語意ノハヅミヲ寓ス」ように、「文理」はただ字義を単純に足していけば得られるものではなく、それには語と語との関わり合いによって生まれたある種の関係を含む。更に『淇園文訣』に用いられる「文理」にはただ文や文章の展開の仕方やその流れという意味以上に、表現の因って立つ所の規則という意味合も含まれていることは次の引用から明かである。

文理ト云モノモ、畢竟ハ、字義ト同ジ素性ナルモノナレドモ、此モ吟味シテ、古文ノ文理ノ格合ヲ合點シ、案内ヲ識リテ居ラザレバ、古書ヲ解スルニモ、處々ニテ疑惑ヲ生ジテ、通曉ナリ難ク、文章ヲ書クニモ、其文理ヲ行ルコト、定法ヲハヅレ、或ハ不足、或ハ迂廻ノ辞理ヲ付ケ、拙ナキコトニナルコト多シ。『淇園文訣』(上/6)

そして『助字詳解』では「文理」は「語勢」との関係によって説明されている。

サテ一切ノ文理ト云フモノモ、其語勢ニヨリテ生スルモノナリ。(中略) 語勢ト云モノハ文字ノツキ合セト語意ノウツリ様ノ品ノ立チカタニヨリテ其中ニ含メル意氣ノイキオヒガ即チ語勢ト云モノニナルコトナルガ故ニ其要トスル所ハ字義ナリ。

『助字詳解／総論』

ここでは、「字義」は依然言葉の辞書的な意味であるが、「文理」は文の脈絡とほぼ同じ意味になり、「語勢」は『淇園文訣』の「語意ノハヅミ」にほぼ当るが、ここでは語と語との関わり合い、つまり関係という意味になっている。「語勢」は語と語との関係とその機能面を重視する概念として、「文理」よりも一層文法の意味に近いものと考えられる。そして「文理」は文法的な側面を含みながらも、多分に文意の脈絡の意味合いを持つ。ここで淇園の考えを敷衍してみよう。

言語における意味の問題は就中その「用法」にかかっている。語の意味は言語の使用において決定される。これは個々の言葉の意味はその用いられるコンテキスト(「句・章・篇」)において決定されることを意味する。言語の研究は口頭によると文献によるとを問わず、つねに広い意味での「テキスト」によらなくてはならない。「語勢」「句法」、それにコンテキストの構成原理である「文理」こそ、「字(語)」をして具体的に意味あらしめるところの全体者である。それは謂わば語の syntactical な関係であっても、語そのものの semantical な関係ではなかったものである。「語勢」と「文理」は意味と意味との関係であっても意味と外なる事物 (extra-linguistic) との関係ではなかったのである。ここで初めて淇園は、語に対する文のプリマートを認め、語(字)と文との関係について総合的な見方、全体観的な見方を手に入れただけでなく、語(字)とコンテキスト(「句・章・篇」)との間には、互いに相手の存在を前提とし、相互に規定しあう相関的な関係をも見ていたのである。淇園は言葉の辞書的な意味と、その言葉と言葉との関係を支配する規則と、これらに基づきながらこれらを統合した形でのテキストという三つの言語部門を区別するように至ったのである。これは取りも直さず、語彙、文法、テキストという言語研究の三つの部門に外ならない。しかし、言語の使用においては、個々の言葉の意味はその用いられるコンテキスト(「句・章・篇」)において決定されると同時に、聞き手に対する表現行為であるという意味を持つ。これは言語は話し手と聞き手との間で行われる意味の伝達行為であるという淇園の言語観から当然導き出されるものである。次

の引用はそれを伺わせるのに十分である。

正當無名ト云コトアリ。是文章ヲ書クニハ、第一ニ知ルベキ要義ナリ。總別文字ハ、正シク其眼前ニ當レル事ニハ、用ユルコトナキモノナリ。故ハ、タトヘバ、今其人ノ目、火ニ向ヒテ居レバ、只此トノミ云テ、火ヲ指シ云フコト、自カラ聞コユ。花ノ枝ヲ手ニ握リ居レバ、只此トノミ云テ、花ヲ指シ云フコト、自カラ聞コユ。奴僕ニ云付テ、烟盆中ノ火入ニ、火ヲ入レサセントスルニ、只指ヲ以テ、其火入ヲ指シ見スレバ、火ト呼ハズトモ、火ヲ入レヨト云コトハ、聞取ルルモノナリ。故ニ正當無名ト云フナリ。正當ナレドモ、其人ノ心、他ニ属シテ居ル時ニテハ、正當ノ物ニテモ、名ヲ呼ブコトアリ。此ハ正當ナレドモ、不正當ト同ジコトニアタレル故ナリ。文字ハ、即チ名ナル故ニ、文字ヲ用ユルコトニモ、正當ナルコトニハ、書ニ及ヌコトヲ知テ、ハヅスベシ。『淇園文訣』(下/33-34)

ここに展開されている淇園の考えを整理して見ると、およそ次のようになる。

話し手と聞き手が面と向かっていて両者の間にある物に対する共通の理解があれば、話し手と聞き手の間には、指示詞とそれに伴う指差し行為で十分コミュニケーションが出来る。話し手と聞き手が面と向かっていながら、言葉を用いるというのは、聞き手の注意がその指示対象に向けられていない状況であり、心理的には同じ「場」を共有していない場合である。その意味では、指差し行為は音声言語の指示詞の代替であり、音声言語の名詞は指示詞の代わりになる。更に書記言語の文字、文章は音声言語の代わりをなすものであるというわけである⁸。ここでは、先ず言語使用における聞き手の注意を言語使用を左右する要因として考慮に入れていることに注目したい。これは淇園の一貫した態度であり、言語研究の聞き手重視の立場だと言える。そして以上の引用からは、言語は話し手と聞き手との意味伝達の行為で

⁸名詞と指示詞との関係についての淇園の考えは、例えばパースの所説と読み比べると興味深い。

「私」「汝」「あれ」「これ」は名詞の代わりに用いられるという理由はない。それらはもっとも直接的な可能なやり方で事物を示す。主張がかかわるものを示すことは指標記号による以外不可能である。代名詞は指標記号である。他方名詞はそれが表わす対象を指し示さない。また何について語られているかを示すのに名詞が使われる時、代名詞なら直ぐに行なうことを名詞はできないという無能を償うために、聞き手の経験が頼りにされる。こういう訳で名詞の方が代名詞の不完全な代用物なのである。名詞は動詞を補うためにも役立つ。代名詞は、第一と第二の人物が適当な現実的結合を持っている任意のものを、第二の人物の注意をそれに向けることによって指し示すような単語として定義すべきである。(パース、C.S. (1986) p.54-55.)

あるという考えがはっきりと読みとれるだけでなく、洪園にとっては言語の本質は単にそれを産出する人間の精神的エネルギーの産出活動に加えて、自然と人間、主観と客観、個人と個人との媒介者であるということになる。洪園は言語の本質を人間精神のエネルギーと媒介性において見たのである。

四 中国語の助字研究

特定の言語を対象とする言語研究では、対象言語のどこから切り込むかを選択しなければならない。これがその人の研究方法を規定するだけでなく、その成果をも左右することになる。洪園の中国語研究においては、まず文献ごとにその助字の用法をまとめる三つの「助字法」があり、そして品詞別の文典がある。三つの「助字法」については、戸川（1980）が「ある一つの文献に限って用語を類集した文典としては、近代の歴史語法の観点に通ずるところがある」と評価しているように、その研究方法の斬新さは夙に注目されているところである。いまここで、その斬新さの何たるかを敷衍してみよう。

文献ごとの用語研究には、まず言語の歴史的に変化する側面（通時的なあり方）に対する認識と同時に、ある時代において複数の作者による文献、同一作者による文献に用いられている用語における相対的に安定した側面（共時的なあり方）に対する認識が、前提として必要である。この二つの認識は、近代言語学の洗礼を受けた我々には至極当たり前のように思われがちであるが、近代言語学に到達するまでの長い歴史と洪園の置かれた近世日本という歴史的な状況を考えれば、この二つの認識を持つことは決して容易なことではない。就中、言語の通時的なあり方に対する洪園の認識は、ただその研究成果から伺われるだけでなく、『問学挙要』で次のように述べられていることから実証される。

古今言に殊なる。人皆之を知る。然れども、秦漢以前を以て概して之を古と称し、混同して別なき者に至るは、則ち疎なり。夏商の文と周の文とは、樸質彫琢に自ら同じからず。乃ち尚書の諸篇、徴すべくして、晩周の人と雖も、又已に輒ち其の先周の文に通ずること能はず。（中略）則ち見るべし。周人已に自ら、其の古言を難んずるなり。西漢又文武の世を去ること、更に隔遠を加ふ。其の晩周に於けるも、亦

猶晩周の先周に於けるが如し。則ち古言の通じ難きこと、必ず又倍甚しからん。『問学挙要／弁宗第四』

これによって、淇園は言語の変化をその時代時代の言語資料に基づいて、通時的に細かく観察したことが伺われる。一方言語の共時的な側面に対する淇園の認識を示すものとして「同字一律」という考えがある。

東周以前の文、其の字必ず相愜ひ、其の句必ず相順ふ。蓋し一章の間、字同じうして疊出する者、其の旨必ず一律に帰す。一篇の間、句同じうして累見する者、其の意必ず一途に会す。(中略) 則ち奇を出すの法も、亦其の来ること尚し。然れども其の大段に至りては、決して前後別調なる者なし。『問学挙要／析文理第五』

これは同一「語(字)」の同じテキストにおける意味解釈の統一性を説く発言として注目に値する⁹。

そして、言語の「通時的なあり方」と「共時的なあり方」に対する認識は例えば『太史公助字法／助字法題言十則』からも伺われる。

一、左氏、国語俱に出入有り、司馬、班椽互に異同を見る。世遂に以謂らく、古人の字を用ゆるは定律有ること無しと。殊に知らず、彼は猶ほ屈乖の環を授くるのごとし。自ら然らざることを得ざるなり。其の矩度何ぞ曾て銖分を差へん。故に是の編題を命じて法と云ふ。亦其の三尺を掲ぐと。『太史公助字法／助字法題言十則』

確かに時代を隔てた幾つかの文献の間にはそれぞれ「用字(用語)」の「出入」や「異同」を見ることはある。しかし、それは言語変化の結果に過ぎず、個々の文献或いは同一の作者の「用字(用語)」には、自ずからそれを規定するような必然的な何かがあるはずである。つまり、一つの文献における「用字(用語)」から一定の法

⁹ 『淇園文訣』では「同字一律」は次のように言葉の意味一般に関わるものとして理論化されている。

同字一律ト云フコトヲバ、問学挙要中ニモ、此ヲ論ジタレドモ、今更ニ其由ヲ明カス。凡ソ文字ハ、已前ニモ言タル如ク、符牒付ナリ、文一篇、又ハ一語ノ内ニテハ、又其内ニテノ意象ヲ立タル處ノ符牒付ナル故ニ、フト其文字ヲ其一事ニ呼ビテ、其名ニ付ケタレバ、最早外ヘハ用ヒガタシ、用ユレハ、意象ノ紛キレトナリテ、文意語意ノ聞ヘヌコトニナルコトナリ。『淇園文訣』(下/11-12)

これはとりもなおさず、言語の共時的な相における言語の最小単位としての語(「字」とその音形式との精確な一対一の対応関係を重視する立場である。D.Bolinger が意味と形が一対一の対応関係(one form for one meaning, and one meaning for one form)を保持することをその言語理論の原理としていることはよく知られている。

則的なものを看取しようとするところに『太史公助字法』の主旨があり、淇園の立場があるのだと言えよう。「助字法」と命名したのもそのためだと考えられる。そして、時代のそれぞれ異なる幾つかの文献の「用字（用語）」を帰納してはじめて言語の通時的なあり方を浮き彫りにすることができるとすれば、『太史公助字法』に続いて、『左伝助字法』『詩経助字法』を著した淇園の目指すところは自ずと明白である。淇園の助字研究の根底にはすでに言語の通時的なあり方と共時的なあり方に対する認識があったことは見逃すべきではない。

以上見てきたように、同時代の他の漢学者とは違って、中国語の研究は淇園においては単に古代中国語の研究のみではなかった。或いは『詩経』、『左伝』のようにその文献の代表するある一時期の言語を対象とし、或いは『太史公助字法』のように、言語の体系性のある一個人の言語使用に見ることは、紛れもなくそれぞれの文献を一つの共時的な側面において研究することであり、そしてこの三つの文献を中国語の歴史的研究という縦糸にそって眺めるとき、自ずと言語の変化という動的な有様が看取される。助字は助字としてそれ自身決して概念をもっておらず、持っているのはもっぱら文法的機能であり、いわば表現を支えるその言語の精神的な底流の動きがそこに現れるところである。助字の歴史は即ち助字の文法的機能の歴史であり、中国語の助字は虚字からの転用が殆どであることを考えれば、淇園の目は自ずと文法化のプロセスに向けられたことは明らかである。以下、『助字詳解』からその一例を示す。

「用」 此字漢ヨリ已前ノ文ニハ、助辞ニモ書タルコト間々アリ、全体ノ字義、其物若ハ事ヲ我処ニスルコトヲバ、此形ノ内ノ物ニ深クトメルコトニシテ、サテソレヲ向フニ着ルコトニシテスエユクト云ココロニテ、譬ヘバ、筆ノ本ヲ手ノ指ノ内ニトクト持テ、サテ其筆ノ先ヲ向フヘ着ケルコトニナシスエユクコトヲ云テ、用筆ト云フ、人ヲ用ユルト云モ、先其ヲバ我ニツキテハナレヌ物ニシテ、サテソレヲ使フコトニスルコトナリ、助辞ニテハ、ソレヲ持コミユキテト云ココロニ心得ベシ、『助字詳解ノ用』

この一例に限らず、淇園の助字研究の具体的な成果は、『助字詳解』において助字の文法化の過程を視野に入れた意味解釈の数々に集大成されている。淇園の三つの

助字法は正に近代の実証的言語研究に範を示したと評されるべきである。

淇園の助字研究でもう一つの大きな特徴は、意識的に中国語と日本語との比較研究を行ったことである。これを最も端的に表わしているのは、中国語の助字を理解するのに、日本語のテニヲハのニュアンスを手がかりとするという方法を用いたことである。次に一例を挙げる。

也 此モ語尾ニ用ユル字ニテ本邦ノ人ノ言語ニ常ニ用ユル所ノ、コレハソレデヤ、カヤフノコトデヤナド云フデヤノ意ニアタル文字ナリ。『助字詳解／也』

しかしこれは単に理解の便を図るためのものではなく、「凡ソ助字ト稱スルモノハ、唯本邦ノ言語ニ用ユル所ノテニヲハノ類ナリト心得ベシ」（『助字詳解／総論』）と述べているように、助字とテニヲハとの機能面の一致を前提としている¹⁰。日本と中国とはもとより二つの異なった国であり、従ってそれぞれの言語も同一ではない。にもかかわらずそれらはそれぞれ異りながら何らかの規則性によって支配せられているという点において共通している。それは言語の機能面における共通点に他ならない。そして『助字詳解』においては「言語比較」（実は言語の対照）がその関心の主要部を占めることになり、これを通じて言語一般、言語の本質への思索が更に精彩を帯びてきて、淇園の言語的関心は一層拡大され、深化されたと言える。根本的には、ただ一つの中国語を出発点としつつ、日本語との比較によって拡大された視野を拓こうとしたのである。我々は淇園の言語研究をいうとき、単に抽象的な、思弁的な理論の展開を想像しやすいが、実はその行論のもとには無数の独自の具体的な研鑽が蓄積されているのである。

淇園の言語研究の成果は以上によってその性質の大体を想像することができる。

¹⁰ 淇園が機能において助字とテニヲハとの類似を唱えるのに対し、宣長は中国語の助字は構文的には不可欠ではなく、単なる余剰であると唱えたことはよく知られている。

先達ノ教訓ニ、テニハハ漢文ノ助字ノ如シトアルハ、助字ヲ甚重キ物ト心得ラレタル也、助字トテニハトハ、大ニスズノチガフ事也、助字ト云モノハイクヤウニモ用ヒカタモアリ、置ヤウモカハリ、又一向ニ助字ナクテモ、文章ハキコユル也、ヒツキヤウ助字ハ、文章ノ餘勢ノヤウナルモノ也、テニハハ一字タガフトイヘトモ、ソノコトバ解セズ、甚重キ事ナリ。『あしわけをぶね』

しかし、「余剰説」も「不可欠」とする説もそれぞれ一面の真理しか言っていない。実際、表現内容の一つの事柄、命題的な意味において解すれば、助字は余剰のように見えるが、実際使われている文脈に即して言えば、助字の有る無しは甚だ重いものになるのである。淇園と宣長はそれぞれ語用論の意味と命題の意味を問題にしているのである。これは両者の言語研究の態度の違いによるものと考えられる。

それは巨視的であるとともに微視的であった。思弁的であるとともに実証性を帯びていた。問題はしかし、これまで見てきた洪園の考えと、現在解明された限りでの「開物学」との間に如何に整合性を保つかである。もしこれらの考えを「開物学」に含めるとしたら、「開物学」は言語を厳密な方法によって分析し、言語の全体を部分のあり方と、その作用との相互関係によって見定めようとした目的性があったと言える。もし「開物学」が言葉の真の意味を極めようとするものであれば、それは言語使用における様々な個別的な意味を越えた、否それらのすべてを統一する何かを求めようとしたものに他ならない。そしてそれは究極においては「一つの形一つの意味」という理念であり、「同字一律」（一時代、一文献内での同じ語の意味は同じであるという意味において）の目指すところとも軌を一にするものでなければならない。開物学の目指すところは三つの「助字法」における個々の用例の収集とその意味の帰納を越えた根元的な意味の探求であり、それは単なる数による枚挙ではなく、質的な帰納である。洪園にとっての「開物学」は言語使用における意味の種々相を統括する究極的な一つの意味を求めるために考案されたものであり、三つの「助字法」は「開物」の産物でもなく、単なる「開物学」の実証の場でもなかったのである。そして洪園においては演繹的で形而上的な言語研究と帰納的で実証的な言語研究とはその一生涯を通じて常に平行して行われ、そして二つの手法も交互に用いられていたものであり、必ずしも一方がもう一方の産物のように単純化することはできない。

五 まとめ

洪園の言語研究は古典中国語を対象とする記述的な側面と、今日我々が言語学と称する学問の構築を目指した理論的な側面とを合わせ持っている。彼の「開物学」は言葉の意味を扱う学問として位置づけられ、「言語の学」の意味合いを持つ。彼の言語研究は以下の五点において現代の一般言語学的な考えに通じるものとして注目に値する。

1、言語をその使用において観察し、表現以前に属する意味の産出過程と、表現以後に属する意味の理解過程との認識に加え、言語は話者と聴者との間で交わされる意味の伝達行為であり、言葉の意味は人間の主観的な内的現象であるという認識

が鮮明にされていること。

2、このように、話者と聴者との心的状態や内的過程に目を向けることにより、言語を、単なる意思伝達的手段としてばかりでなく、一個の記号系をなすものと考えたこと。

3、言語の音声の局面とその意味の局面との間に、「意味するもの」と「意味されるもの」との関係を認めたこと。

4、その言語研究からは言語の共時的なあり方と通時的なあり方に対する認識が伺われること。

5、その言語研究からは「語彙」「文法」「テキスト」という言語の三つのレベルが区別されたこと。

そして、彼の言語観はおおよそ次のごとくまとめられよう。

我々人間をとりまく現実世界には、「有形の物」と「有象の物」のような外在的な物質的な存在である「物」と「事」がある。人々がある物や事を心の中でイメージしている時、そのイメージは即ち「象」である。この「象」はそうした外在的な事物そのものではなく意識せられた事物つまり心理的な実在である。人々は、その「象」を「声」で表現する。そうして表現された「声」には物や事の「象（物象）」、つまり意味が宿り、それが「名（言葉）」になる。「名（言葉）」によって指示されるものは「物」や「事」であり、「名（言葉）」を文字化したものが「字（文字）」である。つまり、音声言語において、「声」は「名」の音声局面であり、「象」はその「声」によって指示される意味局面に当たる。それが書記言語における「字（文字）」と「義（書記言語としての意味）」とに対応し、「字」は文字記号であり、「義」はその文字記号の意味である。そして、「名」と「物」、関係を成り立たせるものは、「神（神気）」である。この「神（神気）」は、まさに「人の聲音」と「物の情態」との間に介在し、それを統べる体のものである。それは即ち人間の精神作用であり、人間の言語を産出する源となるエネルギーに他ならない。

一方、「物」「事」と「名」との間に言語の物に対する志向性、つまり言語の指示作用があるのに対して、「象」は事物の似姿であるが、それは単に事物の模写ではなく、事物の表現である。それは単に内なる対象ではなく、表象であり、表現される

ことを前提とする、意味ある対象でなければならない。「声」と「象」との間には指示作用とは違った、言語のよって立つところの意味作用がある。意味とはそれ自ら一つの物質的事物でもなく、単なる精神的現象でもなくして、精神と事物との関係であり、精神作用（「神（神気）」）と物的事象（「象・物象」）との間にある何かである。言葉は精神の働きであり、その源は人間の内的な精神作用である。言葉はどこまでも主観的世界のものであり、話者と聴者との間に行われる意味伝達の手段である（「名・物」「声・象」「神（神気）」）。

そして、言語内世界においては「物」に対する「名」は言語の命名行為に過ぎないが、そのような「名」が何ものかを表現し、意味を持つのは語としてではなく文としてであり、正しくいえば文における語（「声」と「字」）としてでなければならない。正確なる意味は文章（「文」「章」「篇」）の単位として用例の示されることによつてのみ始めて決定される。命名は物そのものを指示するが、必ずしもそれを表現してはいないはずで、事物の意味は単に命名せられるのみではなく、表現され、理解されるべきものでなければならない。

話し言葉はあるものに対して話者と聴者との間に共通の了解の場が確立されていない場合、指さし行為の代用として必要となる。指示詞は指さし行為の代用であり、名詞は指示詞の代用である。書き言葉（文字）は、更に遠く離れた相手に物事を伝えるために用いられ、それは話し言葉の代用となる（「正當無名」）。

言葉にはまず辞書的な意味を持つ最小単位「字（語）」があり、それを組み合わせて「句（文）」が作られる。「字」からなる語の連鎖には自ずとその相互の関わり合いから一定の関係「語勢」が生まれる。「字」と「語勢」との関係をもとに文章の脈絡「文理」が生まれると、淇園は考える。

参考文献：

- 泉井久之助（1967）「言語学」『言語教育科学』第五卷。
- 泉井久之助（1976）『言語研究とフンボルト』弘文堂。
- 泉井久之助（1976）「言語研究の歴史」『岩波講座日本語 1 日本語と国語学』岩波書店。
- 銭 鍾書（1979）『管錐編』（第一冊、第二冊）中華書局（北京）。
- 竹岡正夫（1963）『富士谷成章全集（下）研究篇』風間書房。
- 戸川芳郎（1980）『漢語文典叢書第四卷 虚字詳解』解題『漢語文典叢書 第四卷 虚字詳解』汲古書院。
- 野口武彦（1990）「開物と声象—皆川淇園の「怪物学」解説のこころみ—」『江戸文学』第二号、ペリかん社。
- パース, C. S.（1986）『パース著作集 2 記号学』内田種臣編訳、勁草書房、1986。
- 浜田 秀（1993a）「「開物学」の発想について—「均繇三十六則」を中心に—」『国文論叢』第 20 号、神戸大学文学部国語国文学会。
- 浜田 秀（1993b）「皆川淇園の開物学の方法について」『国文学研究ノート』第 27 号、神戸大学「研究ノート」の会。
- 脇岡泰典（1996）「皆川淇園の開物学」『中国研究集刊』寒号（1996）、大阪大学文学部中国哲学研究室編輯。
- 平田篤胤（1914）『古史本辞経』『平田篤胤全集』（第十二卷）法文館書店（東京）。
- 本居宣長（1968）『あしわけをぶね』『本居宣長全集』（第二卷）筑摩書房。
- 山内得立（1967）『意味の形而上学』岩波書店。

書誌と本文：

- 『太史公助字法』（刊本二卷、宝暦 10（1760）年）『漢語文典叢書』（汲古書院）所収影印本。
- 『左傳助字法』（刊本三卷、明和 6（1769）年）『漢語文典叢書』（汲古書院）所収影印本。
- 『問學舉要』（刊本一卷、安永 3（1774）年）京都大学附属図書館蔵。

『詩經助字法』（刊本二卷、天明 3（1783）年）『漢語文典叢書』（汲古書院）所収影印本。

『名疇』（刊本六卷、寛政 9（1797）年）京都大学附属図書館蔵。

『助字詳解』（刊本三卷、文化 8（1811）年）『漢語文典叢書』（汲古書院）所収影印本。

『淇園文訣』（刊本二卷）京都大学附属図書館蔵。

『易学階梯』（写本三卷）京都大学附属図書館蔵。

『易学開物』（写本二卷）京都大学附属図書館蔵。

なお、引用に際して、『問學舉要』は『日本思想大系 近世後期儒家集』（中村幸彦校注、岩波書店）所収の活字文を、『易学階梯』は『日本哲学全書』（三枝博音編纂、第一書房）第九卷所収の活字本を、それぞれ原本と併せて参照した。

（1996.6.26. 一稿）

（1997.3.13. 改稿）

Summary

On the Linguistic Studies of Kien Minagawa: His perspective on language

Changbo Li

Kien Minagawa (1734–1807) is known as a Japanese Sinologist of the Edo period. The present author would like to argue that Minagawa's linguistic inquiry is worth noticing for the following four points:

1) Studying psychological processes of the speaker and the hearer by observing language in use, he considered that language functions as a means of communication and that it does so as a system.

2) He clearly recognized that meaning is loaded onto linguistic expressions through the human, subjective mental activities of coding. Not only did Minagawa differentiate the meaning existing in the mind of the speaker both prior to and subsequent to the encoding process, but he also understood that the essential function of language is that of communication between the speaker and the hearer.

3) Minagawa identified the relation between the phonetic aspects of linguistic signs and the meanings carried by them with the relation between something signifying and something signified.

4) He seems to have been aware of the necessity of distinguishing between synchronic and diachronic aspects of language.

Kien Minagawa's view of language can be summarized as follows:

Language is the product of human mental activities. More precisely, language is to be regarded as a fundamentally subjective mental process, one which effects the transference of meaning from the speaker to the hearer. (“mei(名)”, “bu-tsu(物)

”, “sei(聲)”, “shou
(象)”, and “sin-ki(神氣)”

Spoken language (speech) works as a necessary substitute for the act of pointing when the speaker and the hearer are yet to establish a common ground of mutual understanding concerning a thing or an event. Demonstratives are employed as the substitutes for the act of pointing, and they themselves are replaced by substantives. Written language (characters) are utilized to inform someone at a great distance of states of affairs, so that they serve as the substitutes for spoken words. (“sei-tou-mu-mei (正當無名)”)